

卒業研究中間報告

「多摩市におけるコミュニティ・デザインの必要性 -学生の役割とは-」

梅澤ゼミ 4 年 高橋 草太

〔研究の内容〕

地域を活性化させる上で、行政や地域が学生に求める役割とはどのような内容なのだろうか。学生が地域の活性化に貢献することでどのような効果が見込めるのか。以上の内容を、コミュニティ・デザインというキーワードを基に、実際の先行事例を本や活動報告論文から研究していく。

また、私が今までゼミの活動で培った経験や人の繋がりを活かし、関わった方々へのヒアリング調査をしていきたいと思う。内容としては、学生が地域の活動に加わることでどのような変化が起きるのか等である。

最終的には、ヒアリング調査結果と多摩市の現状を併せて考え、そこに先行研究の事例を照らし合わせて自分なりの解釈や考え、今後の多摩市における行政、地域、学生の連携のあり方に対する提案を行いたい。

〔研究の背景〕

私は 2 年間、ゼミの活動でコミュニティ・デザインについて学び、学んだ知識を地域の活性化繋げてきた。ゼミではグリーンライフ・プロジェクトというプロジェクトを中心に活動した。グリーンライフ・プロジェクトは「多摩地域に暮らす幅広い世代の方々を結び付ける仕組みづくりを行うこと」と、「若い世代に対する技術の継承」、「緑の大切さを様々な人々に伝えること」を目的として活動してきた。活動を行ううえで我々は、緑に関する知識や多摩の現状などを学ぶために、多摩市立グリーンライフセンター(以下、GLC)のイベントに積極的に参加してきた。しかし、イベントに企画を持ち出すだけでは当初の目的を達成することは出来ないと考え、イベントを通じて知り合ったNPOの「一本杉公園みどりの会」の活動(月 2 回)に参加してきた。活動に参加してから最初の頃は、「単位のために来ているのではないか?」といった厳しい声も聞こえるなど、懐疑的な意見もあった。しかし、活動を重ねる毎に信頼されていく様になり、共にこなすイベントも増えてきた。印象的だった出来事は、GLCの職員から、「ウッドクラフトの講座を行いたい。一昨年まではみどりの会の班員が講師として活動していたが、高齢のため事務的な仕事をするのが難しいから、君たちがそういった活動をしてサポートしてほしい。そのために君たちからその人に講師をお願いしてほしい」と言われたときの事である。その班員の方は当初、我々学生に対してあまり積極的に話しかけたりする訳でもなかったが、その内容をお願いしに行くときには積極的に参加してくださり、講師の件も快く引き受けてくださった。先日、既に後輩に託したイベントに顔を出した際も、その方から、「あなたのお陰でこういった良い

関係を続けることが出来ている。有難う。」と言われたことも、印象的であった。また、GLCの職員から、「我々職員は日々の活動に追われて手がいっぱいになるから、君たち学生が入ってくると助かる」という言葉も頂いた。

こうした言葉や、活動を見て私は、学生が地域の活動に参加をすることで、より一層の地域の活性化に繋げられるのではないかと感じた。学生が地域に出て活動することは、学生にとっての学習だけではなく、地域で活動しているNPOや自治体、サークル等に対する何かしらの変化も期待できるのではないだろうか。

しかし実際には学生が地域のイベントや行事に顔を出す機会はまだまだ少なく、コミュニティ・デザインという言葉も世間に浸透しているとは思えない。そうした現状を見て、何故地域を賑やかす活動を行っているゼミや学生が少ないのか？学生が今よりも地域に貢献出来る方法があるのではないかと、このテーマで卒業論文を書こうと思った理由である。

#### 〔多摩市の現状〕

日本全体の高齢化率と比べてみても、多摩市のそれは国を上回る速度で右肩上がりである。合計特殊出生率も、多摩市は国や東京都と同じように減少傾向にある。所謂、少子高齢社会である。

また、多摩市の財政状況を見ると、市の主な収入は、個人市民税や固定資産税など、給与取得者に負うところが多い。それと同時に、多摩市の人口構成上、他市に比べて生産年齢人口が急激に変化し易い部分があり、個人市民税などの動向への影響が非常に大きい。そのため、今後の多摩市の展望としては、行政が中心となって公共のサービスを幅広く行う、所謂「お客さん化する社会」からの“脱却”が求められる。お客さん化する社会とは例えば、公共の空間（例えば道路や公園）で何か問題が起こったときに、すぐに住民が行政に電話をし、行政は専門家に問題の解決を依頼することで事態の収束が行われることだ。これでは、電話をすれば行政はなんでもやってくれると住民が考えてもおかしくはない。これでは結果的に、「主体的に地域の問題に関わる人間」が少なくなってしまうため、地域住民の地域に関する積極的な意識が育まれるのは難しい。

お客さん化する社会からの脱却のためにも、今後は地域住民の生活に身近な部分で、多様かつ小さな公共的活動の展開が必要となる。こうした活動が広がることで、地域のネットワークが広まり、結果的には日常の暮らしを豊かにすることに繋がる。

多摩ニュータウンは現在、「量的拡大志向」から、「新たな地域密着型産業の創設、地域と連携した活動へ」と転換を迫られている。今後は多摩市のみならず日本全体が、団塊の世代が定年退職の時期を迎える。それは結果的に、地域社会（NPOなど）に多様な知識・経験を持った人間が多く戻ってくるということである。

しかし実際には、そうした活動を煩わしいと考える住民が多く存在する。確かに、現在の日本では昔と比べて繋がりが希薄だというのは確かだが、むしろ人々が望んだからこそ

現在の繋がりの希薄な社会が生まれたのだと考えられる。現在の“繋がりが無さ過ぎる社会”は生き難いが、だからと言って昔の“しがらみの多い社会”に戻りたいわけではない。

多摩市では現在、地域のネットワークが広がると同時に、お互いのライフスタイルや価値観を尊重し合える地域社会が求められている。そのためには、様々な知識や技術を使って相手の興味や行動、考えを引き出せるファシリテーターが、新たな地域の担い手を育てることが必要となってくる。多摩市には現在、多くのNPOが点在しており、NPOの数は東京都の中でも上位に入る。今後は地域の担い手によって、地域社会を維持発展させていくための、価値のあるコミュニティ・デザインの創出が求められる。

しかし、先ほども書いたようにそうした活動の煩雑さを回避したい人間や団体は多く存在する。そのためにも私は、学生が地域団体の結び付けの立場として最適なのではないかと考えている。その理由としては、例えば企業が地域の活動に協力しようとする、どうしても営利的な部分が見え隠れして、一般的な住民は一步引いてしまうからだ。そこで、学生という立場は、非常にフラットであり、地域の方々も接し易いのではないのかと考えた。また、研究の背景で前述した通り、学生ひいては子どもには、大人の本気を引き出す可能性があるのではないかという事を感じている。学生が地域の活性化を担うことで、郷土意識を高め、多摩市で働きゆくゆくは将来の多摩市の活動人口としての成長も期待できるのではないだろうか。

#### 〔研究方法〕

先行研究は、論文の研究もそうだが、まずは学生が行ったコミュニティ・デザインに関する事例を、本などから調べていこうと考えている。そのうえで、コミュニティ・デザインとはそもそもどういった意味を持つのかという定義についても、調べ考えたいと思う。

また、前述した様に、ヒアリング調査を、これまで関わった地域の方々に対し進めていきたいと考えている。具体的な質問内容などは、担当教員と相談しながら進めていきたい。

#### 〔研究計画案〕

##### 2014年

5月～7月前半:テーマの決定と先行研究の実施

7月後半～8月:アンケート調査を実施

9月～10月:アンケート調査の集計、論文のまとめ

11月～12月:SRCに向けた発表準備

##### 2015年

1月:論文の完成

#### 〔参考文献〕

多摩市総合計画基本計画

<https://www.city.tama.lg.jp/plan/942/5964/014168.html>

山崎 亮『コミュニティ・デザインの時代 自分たちで「まち」をつくる』中公新書2012年

山崎 亮『コミュニティ・デザイン 人がつながるしくみをつくる』学芸出版社 2011年